

お お ぞ ら

No.10 (127)

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2008年7月20日

入所者選別

所長 横地 健治

先日、全国重症心身障害児施設長会議があり、その場で東京都立東部療育センターの運営について報告がありました。平成一八年に全面開設となった新しい重症心身障害児(者)施設で、日本で最も豊かな東京都が創った施設です。東京には既にたくさんの方の施設がありますが、人口あたりの施設入所定数は決して多くはありません。新しい入所ニーズの中でも、特に医療度の高い重症心身障害を意識して新施設を創るといふ方針は聞いていたので、どんな施設ができたのか大いに関心がありました。

まず、施設規模は一二〇床で、入所定数は九〇、ショートステイは二四でした(残る六床は医療入院)。入所数に比して、大きなショートステイ規模を持っています。高い在宅者支援機能を指向しているのは妥当なことだと思います。東京地区の適正入所規模はどれ程なのか、今回の九〇の入所定数はどう決まったのかは是非知りたいと思いましたが、その経緯は明らかにされませんでした。

しかし、その場で話された

入所者選考過程については考えさせられました。まず、東京都内の児童相談所を通じて入所希望を募ったそうです。九〇の入所定数に対し、二八九名と約三倍の応募者があったそうです。応募者の年齢の内訳では、一八歳以上の成人が二〇八名でした。約4は成人だったということです。子が成人ならば、親は高齢となっており、家庭介護が限界となっているので、施設入所を希望するのは当然の帰結でしょう。これに対し小児の入所希望はやはり少なく、今の親は重症心身障害でも家庭でみていきたい意向が強いことが明らかにされています。

私の予想を超えて驚いたのは、応募者の医療度の高さです。七四名(総応募者の26%)が気管切開を受けて、四〇名(14%)が人工呼吸器使用者でした。これを二〇八名の成人の応募者に限ってみても、三〇名の気管切開(総成人応募者の14%)、八名の人工呼吸器使用(4%)がありました。人工呼吸器使用といった高度医療ケアを受ける重症心身障害は、静岡県西部地区では、大半が小児ですので、成人の人工呼吸器使用者は東京地区の方がはるかに多いと思われる。東京地区の在宅人

工呼吸管理の歴史の長さ、施行率の高さがこの数字に表されています。静岡県西部地区に勝る障害医療福祉の先進性に脱帽します。

もっと驚きの数字は、応募者のうち一二名(総応募者の4%)が入所判定を待たずに亡くなったということです。年齢別にみると、六歳以下の応募者三〇名のうち七名(23%)が亡くなっていました。重症心身障害乳幼児の重症度の深刻さがわかります。

どういう選考基準で、応募者の約1/3に対し入所決定をしたのかは最も関心がありました。したが示されませんでした。単純に医療度が優先されたわけではありません。四〇名の人工呼吸器使用者のうち入所となったのは二〇名(50%)でした。成人の人工呼吸器使用者は全員入所したかというところではなく、八名のうち三名は入所できなかったようです。一部の親は、高齢となっても、粉骨砕身、わが子の人工呼吸器管理を続けるをえない状況が続くことになりました。前述したように、施設入所を希望するような在宅重症心身障害児(者)には高い死亡率があります。親が在宅での医療的ケアに不安になり、施設入所を希望したが、かな

えられなかった場合、不幸な転帰に至ってしまう可能性は十分ありえます。親は入所判定からもれたことを不満に思うでしょう。正当な入所対象者から、無理に少数の入所者を選別しているように思えます。これは、沈みゆくタイタニック号のわずかな救命ボートに誰が乗るかといった場面を連想させる残酷な選択のように私は思います。

こうした残酷な選択をせざるをえない前提がそもそも間違っています。新施設の九〇の入所定数が、はなはだしい過少だったことが根本的な問題です。重症心身障害児(者)の施設入所を支えるには多くの経費が掛かります。しかし、東京都は豊かなので、その負担を避けたとは思えません(静岡県は東京都よりは貧しいので、これを避けていいというのではありません)。地域にとって必要な重症心身障害児(者)の入所定数を確定し、それを整備するという政策的ビジョンがなかったからだと思います。東京都の今回の経験を踏まえて、「必要な」入所施設定数が各地域で整備されるべきです。そのための福祉財政的負担が増すことは避けて通れません。私たち施設側は、より少ない経費で、

より良い生活と医療を提供できるよう努力しなければならぬと認識しています。こうした効率性の追究を前提に、入所規模拡大は不可避の課題と考えます。

介護員研修を終えて

後藤 有希

「また一つ大切な何かを学んだ」という気持ちで、おぞら療育センターに就職して二回目の介護員研修を終える。

昨年、この介護員研修に参加したのをぼんやりと、覚えています。昨年の自分自身、違うことは、新人職員から二年目職員になったこと、先輩ができたこと、ゾーンが、ずばるからだいちになったこと、いろいろと変化しました。

今回の研修では、事前課題として「あの人、いいケアしてるね」についてレポートを作成して、発表しました。私が参加した日は、トランスファア、姿勢について多くの「いいケア」のエピソードを聞きました。

トランスファア一つ取り挙げても、感じることは人によって様々で、その中で、トランスファアをして、マットに降りる際に、利用者さんをまるで割れ物を扱うかのようにそっ

と降ろし、利用者さんの体から手を抜く際もさっと抜くのではなく、ゆっくり抜いている職員さんの話を聞きました。正直、私はこのようなケアをしたことがないな、と思いましたが。確かに、利用者さんのトランスファアは細心の注意をもって行いますし、降ろす時も勢いよく降ろさないように心掛けています。

当たり前のことを改めて思い、これからより良いケアを提供していきたいと思えます。冒頭の「また一つ大切な何かを学んだ」という気持ちは、自分が感じた言葉や文章にできないモヤモヤしたことが多くて、結局何を学んだか後になってよくわからなくなってしまうことがあります。今回、このような機会があり、介護研修を振り返り、「大切な何か」を文章にし、再確認することができて、良かったです。

(だいち生活支援員)

早川實様を偲ぶ会に参加して 篠ヶ瀬信行



六月一日に静岡県守る会主催で、一月一五日にご逝去された早川實様を偲ぶ会が行われました。早川様は、県守る会の初代会長であり、入所者のご父兄でもあり「おぞらの家」の設立

に多大な貢献をされました。おぞらのシンボルマークとなっている西棟に描かれた壁画は、早川様の作品であります。偲ぶ会におおぞらから職員八名が参加させていただきました。ご家族をはじめ関係者の方々の早川様への思いの数々を聞かせていただき、あらためて、ご尽力の大きさを感じました。私達職員は、早川様の思いを忘れることなく利用者の為に努力していきたいと思えました。



ありがとうございました

出雲殿さんよりベルシンフォニーをいただきました。新楽器ベルシンフォニーは『ベルによる生演奏』と『コンピュータミュージック』を組み合わせた、ベル自動演奏システムです。現在、エレベーター棟三階のエレベーターホールに置かせていただいています。入所・通所の利用者さんに変喜ばれています。



●苦情解決委員会より●

期日	苦情内容	期日	苦情解決の結果
2007 11月	利用者ご家族より「短期入所サービスの利用枠が減ったため、以前のように利用できなかった」という意見があった。	2008 1/10	ご指摘のとおり、入所利用者の増加によって短期入所の枠が減っております。また、現状では利用枠を増やす事はできませんが、今後このようなご意見に応えられるように施設として検討したいと考えております。 (なお、平成20年4月現在、施設の増床について静岡県及び浜松市に相談をしております)
2008 2/14	利用者ご家族より「おむつ交換用のトイレの椅子が狭く車椅子では入りづらい」との申し出があった。	2008 3/6	ご不便をおかけし申し訳ありませんでした。おむつ交換時に使用しづらい場合は、職員に声をおかけください。別におむつ交換のスペースをご案内いたします。

私の宝箱

「平凡」

川島 美香

学生の頃、気持ちが折れて投げやりになっていた私に、母はこんなことを言いました。もう何年も前の話ですが、今でもよく覚えています。

「私は平凡が一番だと思って生活してる。宝くじが当たったとか、そういう特別なことはなくてもいい。毎日同じことの繰り返しだけど、それで十分だから。『平凡』って幸せなんだよ。」その時の私は、何となく分かるようで、よく分からないと思いました。平凡って何だろう。私の中ではあまりいいイメージではないし、何故それが幸せなのだろうか。それ以上深く考えることもなく、次第に母の言葉は記憶から薄れていきました。

—それから何年後でしょうか、その言葉の意味を理解する、あるきっかけがありました。

学校に通う時、隣にはいつも一人の友人がいました。学校までの約一時間、面白い話、真面目な話、電車で揺られながら色んな話をしたことを覚えていません。しかし、ある時から私は一人で電車に乗るようになりまし。その友人は、学科が違い、卒業年が私より一年早い子だったからです。近所で同じ学校へ通っている人は他にいなかったため、友人が卒業したら、自分が卒業するまでの一年は一人で通うことにな

る：それは最初から分かっていたことでした。しかし、いざそうなってみると、思っていた以上に私の中に大きな穴が開いてしまったのです。何気なかった日常が恋しくなりまし。当たり前だったことが、当たり前でなくなる。それはとても悲しいことだと知りまし。

私はその時、ふと母の言葉を思い出しました。ああ、きつこういうことを言いたかったのだろうなあと。何気ない日常、当たり前のように流れる時間、実はそれが一番大切なことなのだと。母はそれを『平凡』と表現したので。

このきっかけの後にも、当たり前だったことを失う経験はたくさんありまし。些細なことも、大きなことも含めて。でもその度に、平凡な、何でもない毎日をありがたく思いまし。家族や友達、おそらの利用者や職員と、他愛のないことで笑っている時。支えられていると感じた時。好きなことをして過ごす時間もそうです。普通に生活していると何となく過ぎていってしまうけれど、とても幸せなことなのです。もっともっと楽しく生きたい、今の生活を打開したい、と上を見ることがありますが、それは平凡な毎日がベースにあるから言えるのかもしれませ。今では、平凡という言葉のイメージは変わりました。寧ろそれは私にとって大切なことであり、宝物です。

(はるか生活支援員)

絵本の世界

からすのパンやさん

作：加古 里子 偕成社

青木 めぐみ

二児の母である私には絵本に接する機会が多くあります。娘たちが毎月一冊ずつ購入している、その絵本を持ち帰ります。

又、上の娘は毎週保育園にある本の中から好きな本を一冊借りてきます。そんなわけで家の中は絵本だらけになってしまいま。そして、夕食後は必ずと。膝にはいつてきます。下の娘はなかなか寝むれずにいたので、寝る前のセレモニーとして、同じ本を読んで寝ていま。

そんな私が紹介する本は、「からすのパンやさん」です。この



からすのパンやさんの 絵本

本はわたしが幼かった頃、大好きでよく読んだ本でした。その本と何年かぶりに再会したのは上の娘がまだ二歳になったばかりの頃、図書館デビューをさせた時でした。この本を見つけて嬉しくなった私は早速、読んで聞かせたのですが、まだ早すぎた様で興味を持ってもらえませんでした。

それから三年。長い文章が読めるようになった娘は、「この本、おもしろくて好きなの」と保育園からよく借りてきては読むようになりまし。中でもお気に入りの場面は、いろいろな形を入りの場面は、いろいろな形をしたパンがページ一杯に描かれている所で、「どのパンがいい？私はこちらとこれとこれかな」と聞いてきます。そして、妹にも読んであげたりもしていま。このように長い間、子供たちに親しまれている本はまだまだたくさんあります。そんな素敵な本に接する機会をもっと子供たちにつくってあげられたらいいなと思いま。

昔、自分が好きだった、懐かしい絵本を探して読んでみるのもなかなか楽しいですよ！

(こだま看護師)

あゆみ

(入所)

- 5.7 あすか2名公園に散策へ出掛けました。自然の中での音や陽射し、感触を全身で体感してきました。
- 5.14 すばる2名、浜名湖ガーデンパークへ出掛けました。自然がいったいどの公園で季節を感じたり、外でお弁当を楽しんで食べました。
- 5.28 うらら2名
サンストリート浜北へ。いろいろな物を手にとったり見たりして買い物をしました。昼食はさがみ有玉店にて食べました。
- 5.29 はるか3名
フラワーパークの予定でしたが、雨天…厨房(グリーンハウス)にお弁当を頼み、おおぞらで昼食を食べました。雨天で残念でしたが、いつもよりゆったりと過ごしドライブにも出掛けました。
- 6.4 だいち1名、フードコートでラーメンを食べてきました。普段あまり口にすることがないので、おいしさもひとしおだったでしょうか?その後、スーパーで好みのお菓子を買ってきました。



- 6.17 はるか2名
フラワーパークに出掛けました。梅雨の晴れ間で天気良く、お弁当を購入し外で食べました。きれいな植物をたくさん見れました。
- 6.18 だいち1名、デパートで冷やし中華を食べてきました。色々な具を味わっているようでした。そのあと、シュークリームをデザート代わりに買い、口いっぱい頬張っていました。



- 6.23 はるか3名
桜台の「知久屋」にて天井やそば、うなぎを食べました。その後、周辺を散歩。公園のあじさいがきれいでした。
- ・うららではテラスにきゅうり、トマト、すいかを植えました。
- ・図書館に出掛け、七夕や海など季節にちなんだ本を借りてきて、みんなで楽しみました。
- ・こだまでは、利用者と共にあじさいの花やてるてる坊主を作り、リビングに飾りました。

(通所部門)

あさひ・もみの木

5月 パンプキンの会の皆さんに久しぶりに大正琴を演奏していただきました。利用者の知っている曲を組み入れたの演奏もあり、歌を口ずさんでみたり、かすかにリズムを取ったり、楽しむ利用者の表情はいろいろでした。

- 6月 5月の半ばに植えたトマトやゴーヤーの苗が大きくなり、実をつけ始めると楽しみに見たり、採ったりして過ごす利用者やご家族の姿があります。
ゴーヤーは、日よけにも大活躍してくれそうです。

ひかりの子

- 5.16 フラワーパークに遠足に行きました。天候にも恵まれ、満開のバラと一緒に写真を撮ったり、皆でお弁当を食べたり、穏やかな春のひと時を過ごしました。



(全体)

- 5.14~16 全国重症児協会総会、施設長会議
- 5.18 家族の会
- 5.19 豊橋市障害福祉課関係者5名見学
- 6.1 県重症児を守る会総会職員参加
- 6.6 介護員研修
- 6.12 監事監査、介護員研修
- 6.16 品川区八潮地区民生委員12名見学
- 6.19 介護員研修

	5月	6月
ショートステイ	45人 (219日)	44人 (199日)
日中一時支援	23人 (58日)	23人 (58日)
ボランティア	27人 (7グループ)	24人 (7グループ)
実習	8人 (1グループ)	12人 (5グループ)

今、こうして日本で平和に暮らせるのも、多くの方の犠牲の上に成り立っているんだなとつくづく感じます。命の安全の保障があつてこそ、人間らしく、より良く生きるという目的も達成されます。ずっと平和が続くよう、私ができること…小さなことですが、まずは周りにいる身近な人にも今日この頃です。

(M)

編集後記

八月になると、テレビで終戦関係の番組が毎年放送されます。もちろん私は戦争を体験したことがないので、この時期がくると戦争と平和について考えさせられます。私が大学生だった頃、法学を担当されていた教授が、授業中「さけ、わだつみの声」という本についてお話ししてくださいました。この本は第二次世界大戦末期に戦没した日本の学徒兵の遺書を集めた遺稿集です。先生は学生のとくに戦争を体験されていて、特攻隊の方達がどんな思いで戦地へ赴き、亡くなっていったかを切々と涙ながらに語ってください、私達学生も涙を流してお話を聞きました。今でもその時の授業が忘れられません。